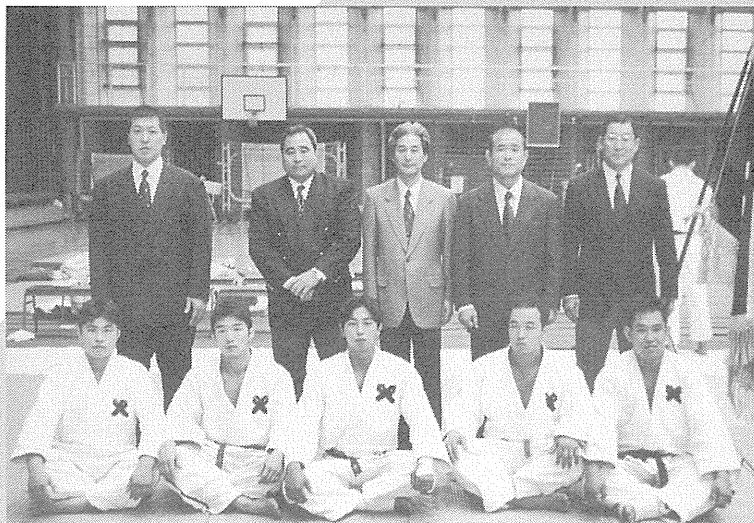


1997年度／平成9年度（平成9年4月～平成10年3月）



役 員

部長：森 征一
師範：岡野 功、安藤 勝英、朝飛 大
監督：清水 正敬
主将：小針 純朗
主務：小田 和哉
副将：島本浩一郎
4年生：勝呂 啓太、米井 慎一
体育会常任委員：勝呂 啓太、松宮 行良、楠原 雄三
副務：近藤賢二郎、高沼 宣浩
日吉高コーチ：楠原 雄三
志木高コーチ：松宮 行良
藤沢高コーチ：助川 忠臣
女子高コーチ：東田あすか
普通部コーチ：米井 慎一
中等部コーチ：瀧本 大成
幼稚舎コーチ：米井 慎一、板垣 宏

私の塾柔道部での思い出

小針 純朗

私が塾柔道部に入るきっかけとなったのは、93年の高校三年の夏に清水元監督の薦めで日吉の柔道場に夏休みの体育の授業に参加した時のことです。その時の乱取りで何人かの先輩とまあまあ"できる"感触はつかめました（当然先輩方は手を抜いて頂いてのですが）。ここでならやつていけるという気がして少し有頂天になりました。そしてそこで登場したのが、唐木さんでした。見るからに手足が長く、組む前は投げることができそうな気がしました。しかし現実は厳しく、実力差ははなはだ大きく、組んだ瞬間こらえる間もなく体落として、ぼこぼこ、ぼこぼこ、ゴロン、ゴロン投げられました。短い時間であまりにもたくさん投げられて、内蔵が揺さぶられ吐きました。唐木さんの技は、実に単純な間合いで、力の入り具合も軽く、ソフトな握りから急激にガツンと強力な引きつけで持っていくれる感じでした。"あっ、来るな"というのが分かり、本来技を見切ることができれば投げられることはないはずなのに、いつも簡単にしかも何度も同じ技で投げられました。悔しさもありましたが、やはり大きな憧れでした。この時、唐木さんがはいていたライン入りのズボンも、唐木さんの長い手足もあって、かっこよく映り、塾柔道部に入りたい気持ちは確かなものになりました。

この人と柔道をしたい。いつか勝てるようになりたい。そして早慶戦で活躍したい。そう願って、慶應を受験しましたが、あいにくその年は学力も不足していて、不合格でした。翌年にめで

たく合格になりましたが、学年として唐木さんと重ならず一緒に毎日稽古をできなかつたことが、本当に残念でしうがなかつたことを思い出します。結局〇Bになつてからも稽古で唐木さんにぼこぼこに投げられることはあっても、私が自分の技で投げることはありませんでした。そしてこの2年後、唐木さんは交通事故で他界されました。

静岡の唐木さんのお墓参りをした際に、ご両親から生い立ちや正義感にあふれた成長期のおはなしをして頂いたとき、本当に胸がつまり涙が止まりませんでした。今もふと唐木さんを思い出すといろいろな想いが去来して、とても寂しくて涙が出ます。

不甲斐ない試合ばかりで塾に柔道で貢献できなかつた私ですが、"唐木さんのように強くなりたい"気持ちは今でもあります。幸いにしてそれが可能な会社ですので、これからも心技体を精進していきたいです。

試合記録

■第46回 東京学生柔道優勝大会 平成9年9月 日本武道館

2回戦 本 勝 0 - 5 専修大学

■第49回 早慶対抗柔道戦 平成9年10月19日 日吉記念館

本 勝		○	早稲田大学	8人残し
勝呂 啓太 4年		引分け	廣田金次郎	優秀選手：助川忠臣、高沼宣浩、島本浩一郎
高野 剛 1年	⊖	背負投げ	吉田真也	
高野 剛 1年		袈裟固め	関谷逸朗	
板垣 宏 3年		大腰	関谷逸朗	
助川 忠臣 2年	○	小外掛	関谷逸朗	
助川 忠臣 2年	○	小外刈り	金辻真人	
助川 忠臣 2年	○	一本背負い	村田康一	
助川 忠臣 2年	○	崩れ上四方固め	上原英樹	
助川 忠臣 2年		引分け	林健太郎	
西森 千景 1年		崩れ上四方固め	藤原慎介	
酒井 敬史 1年		背負投げ	藤原慎介	
赤澤 穂 1年		払腰	藤原慎介	
船越 健 1年		大内刈り	藤原慎介	
瀧本 大成 3年		引分け	藤原慎介	
高沼 宣浩 2年	⊖	大外刈り	高野陽平	
高沼 宣浩 2年		崩れ上四方固め	日野貴文	
大滝 誠 2年		背負投げ	日野貴文	
近藤賢二郎 3年		小内刈り	日野貴文	
米井 慎一 4年		不明	日野貴文	
守 哲司 3年		不明	日野貴文	
池上 学 3年	○	腕絡み	日野貴文	
池上 学 3年		内股	山口勝弘	
楠原 雄三 3年		合せ技	山口勝弘	
松宮 行良 3年		内股	山口勝弘	
小田 和哉 4年		内股	山口勝弘	
島本浩一郎 4年	○	袖釣込み腰	山口勝弘	
島本浩一郎 4年	○	袈裟固め	高谷政典	
島本浩一郎 4年		背負投げ	竹本司	
小針 純朗 4年		背負投げ	竹本司	
			五島孝有	
			富樫竜志	
			永岡祐一	
			工藤大樹	
			浜田知成	
			青井涉	
			村瀬秀行	

■第39回 東京学生柔道二部優勝大会 平成9年10月26日 講道館

1回戦 本 勝	7	-	0	武藏大学
助川 忠臣 2年	○	小外掛	高 澤	
瀧本 大成 3年	○	背負投げ	鴻 巢	
赤澤 穂 1年	○	背負投げ	佐々木	
小田 和哉 4年	○	大外刈り	今 野	
高沼 宣浩 2年	○	合せ技	小 泉	
池上 学 3年	○	合せ技	小路永	

	島本浩一郎 4年	○	崩れ上四方固め	萩 原
2回戦	本 墓	1	-	青山学院大
	高沼 宣浩 2年		合せ技	岩 崎
	助川 忠臣 2年		小内巻き込み	大 口
	島本浩一郎 4年		上四方固め	栗 栖
	小針 純朗 4年			高 野
	赤澤 穂 1年		大内返し	山口(太)
	池上 学 3年		裏投	松 中
	小田 和哉 4年	○	大外刈り	山口(裕)

「第一回綱町柔道祭」報告

昭和六十三年卒 加賀美 有一

平成九年十二月十四日、第一回綱町柔道祭が開催された。筆者は、後にお名前をあげる九名の者とともにその計画と実行にたずさわったことから、ここにご報告させていただくことになった。

昨年の夏頃、今回幹事となった年代の者何人かで、よく行く飲み屋に集まり、最近の柔道部について話し合っているうちに、とにかく皆で道場に集まって何かお祭りをやろうということになった。当初はそれほど大がかりな計画ではなく、案内状だけはできるだけ沢山の人に出すが、あんまり人が来てくれなければ、その店にいた奴だけで集まって管を巻けばいい、という程度のことだった。ところが打ち合わせを重ね、何人かの先輩方に相談にのっていただくうちに、話は次第に膨らみ、最終的には柔友会あげての行事を企画することになった。さいわい昨年は、柔道部創部百二十周年にあたり、新たな伝統を創り出すには区切りのよい年であった。また故羽鳥輝久先輩が生前、柔道部生活を楽しくすることを望んでおられたから、と賛同してくださった方もあった。

ところが、いざ計画を立てる段になってみると、「お祭り」として思い描いているものが人それぞれに異なり、いろいろな案がでてきた。そこで多くの先輩後輩の意見を聞き、調整した結果、最終的には従来の塾内紅白戦に代わる試合を行い、立食の昼食を入れ、また大人も子供も知っている強い選手を招待してお話をさせていただくということに落ち着いた。

柔道祭の当日は天候に恵まれ、朝早くから随分たくさんの方々がお見えになった。今回は、柔道部の卒業生だけでなく高校生以下の部員のご父兄にも案内状を差し上げたので、一緒にいらっしゃったご家族もあわせると、出席者数は幼稚舎から大学までの部員を含めて、百五十人を超えた。

午前十時、道場に整列して礼をした後、渡辺明治会長に開会のご挨拶をいただき、試合を開始した。

試合は、八チームによるトーナメント戦の形式をとった。一チーム八人とし、幼稚舎生から先輩までいた。試合の運営や対戦表の作成は、小野英次兄（平成元年卒）や竹村賢一兄（平成五年卒）を中心にやっていただいた。

午前中に、塾高の鎌木文隆先生、藤沢高校の大塩隆司先生に審判をしていただいて一回戦四試合を行い、昼休みをはさんで午後、準決勝、決勝を行った。決勝の審判は成毛秀臣先輩にお願いした。出場した卒業生は、丸山照雄（昭和二十八年卒）、野口宏水（昭和三十三年卒）、桧山治（昭和三十五年卒）、近藤正士（昭和四十四年卒）、新井基之（昭和六十三年卒）、鈴木康之（昭和六十三年卒）、小林俊二（平成元年卒）、加賀美行彦（平成四年卒）である（敬称略）。特に先輩同士の試合で観客席が大いに沸いた。勝敗は末尾のとおりである。

昼食は隣の剣道場を借りて立食とした。森征一部長に乾杯の音頭をとっていただいた。料理は、三宅尚典先輩（昭和三十八年卒）にカレーやチキンライスなどをご寄付いただいた外、大学近くのラーメン二郎さんに焼き豚をいただいた。また山食に何品か注文した。飲物は、キリンビールの尾川豊隆先輩（昭和六十二年卒）とサントリーの井上猛兄（平成二年卒）にご提供いただいた。和やかな昼食会であった。

準決勝と決勝の間に、古賀稔彦先生に柔道の稽古の心構えと背負い投げのかけ方についてお話をさせていただいた。先生は手慣れた話しぶりで、理論的に実に分かりやすく、大要以下のような説明をしてくださった。

- ・稽古をする際には、必ず何か目標をもつこと、またその目標を達成する期限を決めること。
- ・背負い投げに入るとき、相手と適切な距離をとって、足は、肩幅に、平行に入ること。足の親指に力を入れることによって腰が安定すること。膝を曲げて相手より重心を低くすること。その際、膝が外向きに開いてガニ股にならないよう、また腰が曲がらないように注意すること。体を真っ直ぐに上下させるには、視線を畠に落とさず、真っ直ぐ前を見るべきこと。引手は、相手の袖を持つ場合も懐を持つ場合も遊びが少ないうちに持ち、手首を外に返して、目の高さに引くこと。双手背負の場合、釣手は、手首を内側にひねって襟を巻くこと。一本背負の場合、肘の内側に歯がついていると思って、相手の脇をしっかりと「噛む」こと。

試合終了後、しばらく幼稚舎生が乱取を行い、優勝した小林俊二チームおよび優秀選手の表彰が行われ、近藤正士委員長にご挨拶をさせて閉会となった。

今回は、多くの先輩のご支援をいただき、また実に沢山の方の参加を得たことにより、お祭りを成功させることができた。特に企画の段階で数人の先輩から適切なご助言を受けたことが、お祭りをよりよくすることにつながった。また「四季の会」から多大のご支援をいただいたほか、当日ご出席の方々からもご寄付をいただいた。お昼には、塾高の部員のお母様方が飛び入りでお手伝いをしてくださった。そして学生達も準備から後かたづけまでよくやてくれた。ご協力くださった皆様に、紙面をお借りして厚く御礼を申しあげる。

幹事を務めたのは、昭和六十二年卒から平成六年卒までの許斐氏隆、尾川豊隆、渡辺新、筆者、小野英次、石本千明、小林俊二、井上猛、竹村賢一、本多諭（敬称略）である。先に述べた者のほか、許斐先輩は、計画の全体を把握して数の多い幹事に仕事を割り振り、また諸先輩との交渉を引き受けてくださった。渡辺兄は、写真撮影を担当し、焼き増しの注文をとって発送した。石本兄には、銀行員の技を生かしてもらうべく、受付および会計をお願いした。小林兄は、当日よく働き、そのうえ試合にも出場していいところを見せてくれた。本多兄は、山食との交渉にあたり、また料理の運搬を担当した。

初めてのお祭りであったため、勝手が分からず案内状が間際になって到着するなど、いくつか不手際があつたが、大きな失敗をすることもなく、全体としてはうまくいったことに安堵している。また、筆者は久しぶりに皆で役割を分担して仕事ができたことが実に楽しかった。今年の秋には、また新たな企画を盛り込みつつ第二回を実現したい。

試合結果

◇一回戦第一試合

A 紅	B 白	
先鋒 中川 雄貴	○---	佐久間 亮
長井 賴晃	---○	永岡 陽太
小泉 英之	-×	市野 紘平
川本 尚紀	---	対馬 好宏
渡辺美智隆	---	結城 政広
川崎 行範	-×	中山 賢一
鳥取 直機	○---	前田雄三郎
大将 鈴木 康之	-×	野口 宏水

◇一回戦第二試合

C 紅	D 白	
先鋒 長井 賴寛	---	築田 泰史
富澤 司	-×	安川 峻平
高橋 佑介	---	小野 剛
景山 元一	○---	浅野公太郎
宮下翔太郎	---	中島 光夫
中島 幸夫	-×	山田 洋志
大久保 匠	-×	加賀美行彦
大将 近澤 柳	○---	丸山 照雄

◇一回戦第三試合

E 紅	F 白	
先鋒 藤澤 朗光	---	諸澤 成樹
落合 陽輔	○---	田中 太一
川内 聰	-×	木内 貴彦
落合 隆輔	---	塙山 隆介
菊池 弘人	---	前田 壮象
橋本 陽	○---	村吉花奈子
柴山 典央	---	近藤 正士
大将 隅谷 泰旭	-×	松山 治

◇一回戦第四試合

G 紅	H 白	
先鋒 國見 優太	⊖---	梶川 慶太
安川 浩平	⊖---	渡辺美千綱
富田 晃仁	---	邊 英基

木村総一郎	○---	吉永 直希
上村 亮介	○---	飛世 理志
小林 俊二	○---	土井健太郎
鈴木 創	---	寺尾宗一郎
副将 小林 俊二	○---	二宮 康太
大将 豊島 英征	---	宮本 大祐

◇準決勝第一試合

B 紅	D 白	
先鋒 佐久間 亮	---	築田 泰史
永岡 陽太	①---	安川 峻平
市野 紘平	⊖-	小野 剛
対馬 好広	○---	浅野公太郎
結城 政広	---	中島 光夫
中山 賢一	-×	山田 洋志
前田雄二郎	-×	加賀美行彦
大将 野口 宏水	○---	丸山 照雄

◇準決勝第二試合

G 紅	F 白	
先鋒 國見 優太	○---	諸澤 成樹
安川 浩平	○---	田中 太一
富田 晃仁	○---	木内 貴彦
木村総一郎	○---	塙山 隆介
上村 亮介	---	村吉花奈子
鈴木 創	---	近藤 正士
小林 俊二	-×	前田 壮象
大将 豊島 英征	---	新井 基之

◇決勝戦

B 紅	F 白	
先鋒 佐久間 亮	---	國見 優太
永岡 陽太	---	安川 浩平
市野 紘平	---	富田 晃仁
対馬 好広	---	木村総一郎
結城 政広	-×	上村 亮介
中山 賢一	○---	鈴木 創
前田雄二郎	---	小林 俊二
大将 野口 宏水	⊖---	豊島 英征

追記 試合中剣道場でお酒を飲みながら談笑していたラーメン二郎のオヤジさんは、道場の床で滑って後頭部を強打し、救急車で病院に運ばれた。当日退院したものの、数週間頭痛や耳鳴り、視覚障害があり、年内は店を閉めていた。オヤジさん曰く、「もう二、三年は酒を飲まない」。一月中旬に筆者がお店をたずねたときは、もう元気の様子だったが、まだ時々頭が痛むと言っていた。気の毒なことになって心配していたが、大事に至らずほっとしている。これに懲りずに是非またおいでいただきたいと思っている。

一九九七年アメリカ遠征について

遠征団団長 野口宏水（昭和三十三年卒）

謝辞、献辞

今回の慶應義塾体育会柔道部のS J S Uを中心とするアメリカ遠征は、第五回と慣例化したものとは言え、沢山の方々のご援助がなければ実現しなかったんだろう。

就中、第一回の一九六三年以来、殆ど我が慶應と兄弟部とも言える程親しい交流関係を創り継続して戴いている内田吉博先生（Y O S H I U C H I D A H A L L誕生、お目出度うございます）に特に深い感謝の意を表したい。明大OBでいつも遠征を意義あるものにして呉れている古賀悠三さん、その他、沢山のサンノゼ柔道部の学生、OB（その中には、六十三年以来の柔友G・マテオニさんも居る）達にも、更にロスアンゼルスの明大OBの篠原さん等々。

特筆したいのは、何時も我々学生に暖かいご指導とご支援を戴き、今回も我々を派遣し、貴重な体験を味わわせてくださる三田柔友会の方々、併せてご父兄の皆々様にも深く感謝する次第であります。

ご高承の通り我々の慶應義塾は最強の部ではない。何故ならば慶應義塾の柔道部の部員になるためには私立の雄としての慶應義塾の、最も困難な入学試験に合格しなければ部員に登録されないからである。

斯かる状況、背景がある故にこそ我々は我が国最古の大学（一八五八年創立）、我が国体育会最古の柔道部（一八七七年）の部員であることに大きな誇りを持っており、それはこの長い歴史の中に他に類例を見ないピカリと光る珠玉があるからである。その大きなものの一つが柔道を通じての友情であろう。

柔道……年齢、身分、職業、時には民族、国境、言語、宗教等々を越えて、襟と襟とを掴み合い、膚をぶつけ合わせて、お互いに技から心、心を通じて技を、ここに強い絆で結ばれた友情が生まれて来るものと固く信ずるものである。

嘗て我が柔道部長であった石川前塾長は、「慶應義塾の精神は体育会に在り。その体育会の精神は柔道部に在る。」と言って我々を励ました。

マンモス化した大学の現状を見る時、「塾」と云う心と心の触れ合いの場としては柔道部が最適の場であるとの前塾長のご心境の吐露であろう。

「友の憂いに私は泣き、我が喜びに友は舞う。」

新しい友情を育み、旧い友情を蘇らせる。柔道、汗と涙を流し青春の情熱を注いだ柔道を生涯続けて行くこと（たとえ体が思うに任せなくなつてもこの精神は、）を念願するものである。

この塾柔道部の伝統精神を堅持して、今回の遠征では出来得る限り数多くのアメリカの人々と深く交わり、又、世界に冠たるアメリカの人文、社会、自然の出来る丈多くに接し、吸収し、これを土産として持ち帰り、各人のこれから的人生に反映させて行きたいものと念ずる次第であります。

今般のアメリカ遠征に当たって、冒頭の挨拶状を柔友会の会員各位とご父兄に発信すると同時に、本文と末尾の鎌田栄吉元塾長の慶應義塾創立七十五周年記念「慶應義塾柔道部の記」（昭和七年五月九日）を英語に拙訳して持参した次第です。

さて、第五回アメリカ遠征は九月四日、三田図書館内会議室に於いて、大学より鳥居塾長、湯川体育会理事、森柔道部長、柔友会より渡辺会長、近藤委員長、小林事務局長等にご臨席戴き、暖かいご励辞を頂戴して結団式を執り行い、九月九日、岡野師範ご夫妻のお見送りを受け成田空港を飛び立った。畏友山際正明君を団長とした前回九三年も同様であったが、塾部員の半数は既に海外旅行の経験があり、一九六三年、渡航自由化前の第一回遠征の折に我々が味わったあの興奮は彼等にはない。思えばあの折の、この機会を措いては二度とチャンスは訪れないだろうとか、「吾れ太平洋の橋とならん。」とかの気負い、又、あの折の渡航直前まで行ける、行けないと騒ぎ（当時、北海道に居た石田勝克さんは餞別を貰って出て來たので、もう帰れない等、それぞれの事情を抱えていた）、先輩成毛秀臣さんや木村洋さんが故毛利松平衆議院議員を動かしてお役所を東奔西走してやっと行けたこと等々懐かしく想い出されました。こう云ったことは今の塾生には到底理解し得ないだろうと思った次第です。

さて、サンノゼは鳥居塾長が結団式で教えた通り、日本人が初めて太平洋を渡って最初に居住した地、今や、シリコン・バレーとしてアップル、オラクル、ネットスケープ等々ハイテク先端産業を多数抱え、地域別輸出額でニューヨーク、デトロイトを凌駕、全米トップに、人口も流入激しく、カリフォルニアではサンフランシスコを抜いて二番目となっている。

六泊予定のエア・ポート・インに旅装を解くやすぐ電車でサンノゼ大学構内のY O S H I U C H I D A H A L Lの道場へ。そのH A L L前広場で三日前の九月六日には柔道部創立五〇周年祭が催され、仙石通泰さんが招待されて立派な祝辞を述べられたり、八七年世界選手権七一K級でアメリカ初の金メダルをもたらしたマイク・スウェインに依るジユードー・デモンストレーションがあつたり……来年は新たに今の道場の二倍（試合場二面）の広さになるとのY O S H I 内田先生のお話（慶應OBより多額のご寄附の御礼も言われた）。部創立五〇周年からそのまま滞在を延ばしておられた安藤教授師範とも再会、又、サンノゼ大に留学して部員として逞しく稽古している安藤師範のご令息真介君、又、次のシドニーオリンピックではアメリカより代表選手として出場を目指している岡野師範のご令息徹君、又、六三

年時学生で今は刑務学校で心理学を講じているジム・ペニングトン君等々久し振りの再会に感激する。

このような柔道を通して生涯に亘る友情や感激の再会が何十年か後、今の若き塾生部員諸君に訪れるであろうことを祈りつつ、「柔道」は永遠に通じ合う言語であることを再認識する。

このような「柔道語」について、六三年來の友情、再会について、又、慶應の柔道着のペンのマークの由来、意味、更に福沢先生の柔道についての「先成獸身而後養人心」、「心身之順是柔道」、又、本遠征に隨行の清水監督、朝飛大師範の両ご尊父が偶々私の学生時の師範であられたことから、両先生のお言葉として私に残っている、清水先生の“勝つ者常に正し”、朝飛先生の“柔道も人なり”、“獅子はネズミを獲るにも全力を尽す”等々のお言葉も、サンノゼ道場にて、YOSHIO内田邸 サラトガ・スプリングス（故清水師範命名）での熱き歓迎会の席で、ハワイの道場にて、稽古、試合の前後と折に触れて披露いたしました。又、ヨセミテ、グランドキャニオンの雄大至高の大自然に接し、隣の剣道部からも出ているように“次は君の出番だ、大きな夢を持って欲しい”等々大きな注文をつけたりした。柔道はその強さ、技術等に於いて六三年時と彼等の差は逆転していたものの、この二十五人の中からこの遠征を契機として大きく成長して呉れる人が数多く輩出することを期待しつつ、又、「可愛いい子には旅を」の諺通り、パスポートを一時紛失したり、集合時間にはるかに遅れたり……種々の失敗談も貴重な想い出として、又、白状いたしますが、私もハワイでの最後の晩には可成り安堵のため深酒に酔って帰途に就きました。

塾生部員諸君、この貴重な体験を味わわせてくださった伝統ある柔道部に、柔友会に、ご父兄に感謝しよう！そして試合時には、柔友に“俺に委せろ！”と言って見よう！

慶應義塾柔道部の記

鎌田 福吉

わが柔道部は塾祖福沢先生の奨励に依り明治十年（一八七七年）の春三田山上に開始せられ、爾來漸次隆達したものにして実に我国体育会の先駆をなせるもの也。

内に在っては和親一致塾風の涵養を謀り、外に在っては義塾精神の宣揚に努め、専ら氣品の泉源、智徳の模範たることを期したるものなり。

乃ち、先生の「先成獸身而後養人心」、「心身之順是柔道」と言へる二つの成語の趣旨に随って經營し来れるものなり。

斯の如き光輝ある歴史を有する我が柔道部の部員たるものは深く之を肝に銘じ力を合わせて部の向上を図り流俗の外に立ち独立自尊の塾風に於て思想の中正を保ち将来國家の柱石、社会の儀表たらんことを心懸べきなり。

昭和七年（一九三二年）五月九日

慶應義塾創立七十五周年記念 鎌田榮吉記

Keio Gijuku Judo Club;

History and philosophy
Eikichi Kamata, President.
On the 75th Anniversary

Keio Gijuku Judo Club has its origin in the Spring of the 10th year of the Era of Meiji(1877)on the Mita Hill Campus, sponsored by Mr.Yukichi Fukuzawa, founder of Keio and since then our Club has always played a major role as a leader and pioneer in our nation's athletic fields.

On the one hand inwardly, it aims to foster the Gijuku tradition with the harmonious cooperation and on the other hand outwardly, it aims to enhance the spirit of a private school and as a result, it is devotedly expected to serve as both a spring of nobleness and a model of wisdom. In other words, it should materialize Fukuzawa Sensei's two phrases "Build an animal body first, then cultivate a human mind later.", "It is Judo that keeps both mind and body in perfect order."; these have been the permanent goals of the every generation of Keio Gijuku Judo Club.

Bearing these phrases and its spirit deep in mind, the members of Keio Gijuku Judo Club which has such a glorious history, should strive for the further development of the Club with all the strength, stand strictly outside of the worldly affairs with the spirit of "Independence and self-respect", believe in and exercise the fairness in the thoughts and intend to be an integral pillar of our nation and a model for the public.

Translation by Hiromi Noguchi prior to the departure of Keio Judo Goodwill Mission to the U.S.A.1997.

柔友会報72号より